打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意

岡本 順治 佐々木勲人 中本 武志 橋本 修 鷲尾龍一[1)]

1. はじめに

本稿では，文の統語構造が項構造 (Argument Structure) を介して意味構造と密接に対応しているという立場をとり，動能交替 (Conative Alternation) という現象を英語，ドイツ語，フランス語，中国語，韓国語，日本語の打撃・接触動詞[2)]に限定し，その構文・意味の違いを検討する．本稿の目的は，単なる言語現象の比較ではなく，動能交替という現象が，一部の英語の動詞に観察されるような,「単なる結果達成の含意の違い」ではなく，言語間で共通した交替現象の一部である可能性を示唆することにある．

2. 動能交替の特徴づけ

2.1 典型的な動能交替とは

動能交替とは，典型的に「銃で撃つ」(shoot) というような動詞の場合，撃たれる対象が対格名詞として現れる文と，斜格として「ねらいを付ける」という意味を持つ前置詞・後置詞などで表される文が可能な場合を言う．例えば，中右 (1994：328) では，(1a) の the elephant が，銃弾の直接接触を含意しているので (2a) のようにすると論理的矛盾を引き起こすのに対して，(1b) は，(2b) の文の成立状況から，物理的接触に関しては中立的（五分五分）であると説明している．

(1) a. John shot the elephant.
b. John shot *at* the elephant.

(2) a. * John shot the elephant, but he missed it.
b. John shot *at* the elephant, and he hit it/but he missed it.

(2b) は，Levin (1993:42) の言葉を借りれば,「その行為が実際に遂行されたかどうかを定めずに『試みられた』行為」[3)] ということになり，この行為の結果を含意しない構文を動能構文と呼ぶ．

2.2. 非典型的な動能構文

動能構文は，英語の場合，多くが前置詞 at を従えるが[4)]，完全に接触を含意しない動詞 (hit, strike など) とは状況が異なる例が英語にも見られる．(3a) に対する (3b) は，動能構文だが，(2b) に対応する形 (3c) は非文となる．

(3) a. John beat his dog with the stick.
b. John beat *at* his dog with the stick.

c. * John beat *at* his dog with the stick, and he hit it/but he missed it.

これは，(3a) のみならず (3b) も繰り返しを含む接触を含意しているからで，John は，思ったように beat できなかったという点で (3a) とは達成度の点で異なる．同じようなことが，(4a),(4b) のペアに関しても言えることを Pinker (1989:108) は指摘している．cuts at the bread の意味するところは，「パンを切れなかったのではなく，パンがうまく切れなかった」[5]ことである．これと少し事態が異なって捉えられるのが，(5a),(5b) のペアで，(5b) の場合，scrape を使った動作，たとえば，車のガラスに氷がついているのを剥ぎ取ろうとしたような場合，繰り返しの細かい動作になるが，(5a) では，通常 1 回限りの動作が想起される．また，(6b) では，(6a) と異なり，本来の slap の表す行為ができなかったこと[6] が表現されている．すなわち，(5b) でも (6b) でも結果としての接触は必ず起きている．

(4) a. John cuts the bread.
b. John cuts *at* the bread. Pinker (1989:108)

(5) a. Mary scraped the window.
b. Mary scraped *at* the window. Pustejovsky (1995:9)

(6) a. Mary slapped John.
b. Mary slapped *at* John. Pinker (1989:109)

Goldberg (1995:63) では，動能構文の意味を “X DIRECTS ACTION AT Y” とし，[+ motion, + contact] の動詞の場合に，行為の「意図した結果」(intended result) を示す[7] として，結果の達成を含むかどうかまで言及していない．(7a),(7b) が示すように，touch, move が，動能構文を作ることはできないが，Goldberg(1995:63) が主張するように，move が [-contact] であることは認められるにしても，touch が [-motion] という解釈は必ずしも当たっていない．なぜなら，接触動詞としての touch は， 状態動詞の用法だけではなく，「(手の) 移動」を含む用法があり，この場合なぜ at が取れないかという説明が無いからである．(8) の例文における touch は，どちらも「誰かが意図的に手を伸ばしてあるものに触る」という意味である．

(7) a. * John moved at the door.
b. * John touched *at* the door.

(8) a. He put his hand out to touch the young man's shoulder.
b. Ben didn't touched her yet. Longman (1995;1928)

Goldberg (1995) の，「意図した結果」(intended result)，すなわち，「接触が起きない」という結果の部分に焦点を置いていない分，上で取り挙げた cut at や slap at の例を説明することができる．「思い通りの結果に到達しなかった」という意味が，これらの非典型的動能構文[8]に含まれるからである．しかし，beat at や scrape at の例は，依然として説明が

つかない．なぜなら，beat at や scrape at では，あくまでも意図された動作が行われているにもかかわらず，その動作の様態が違うからだ．この点は，他の言語の動能交替を観察した後に，再び論じることにする．

3．英語以外の言語での動能交替

典型的に [+motion,+contact] の例として，まず「銃である物を撃つ」という動詞に関して，ドイツ語，フランス語，中国語，日本語，韓国語の用例を比べてみよう．

(9) a. Peter schoß mit dem Gewehr einen Vogel.
Peter shot with the shotgun a bird

b. Peter schoß mit dem Gewehr *auf* einen Vogel.
Peter shot with the shotgun on a bird

c. Peter schoß mit dem Gewehr *nach* einem Vogel.
Peter shot with the shotgun toward a bird

ドイツ語の schießen(=shoot) は，前置詞 auf あるいは nach を取り，英語の shoot/shoot at とほぼ同じ動能交替を示す．(9a) では，(9b),(9c) の含意する所は，結果として銃弾が小鳥に当たったかどうかに関しては非関与的である．(9b) の auf の方が，方向としての目標が明確であるのに対して，(9c) の nach では，ねらいを定めるのが大変なぐらい，対象物が移動している場合のみ，抵抗なく使われる．従って，対象の生き物が大きくてすぐに移動しそうもない場合には，不自然な文となる．

(10) a. Paul tira une balle *sur* Jean.
Paul pull a bullet on Jean

b. J'ai tiré un oiseau au vol.
I pulled a bird in-the flight

フランス語の tirer は，元来は英語の pull に対応する動詞だが，une flèche(= an arrow) や une balle(=a bullet) を目的語に取り，sur ＋「目標」という形で，ある物に向けて矢を射る/銃弾を撃つ，という意味になる．(10a) がまさにその例だが，(10b) のように直接，獲物を目的語に置く形も存在し，その意味では一見，動能交替のように見える．しかし，(10b) は，狩猟用語ということで，やや特殊であり，前置詞を介さない (10b) の形すら，当たったかどうかは関与しない．それは，(11) の例が，論理的に矛盾しないことから確認できる．

(11) a. Le chasseur a tiré le lièvre, mais il a raté le coup.
the hunter pulled the hare but he missed the shot

b. Le chasseur a tiré *sur* le lièvre, mais il a raté le coup.
the hunter pulled on the hare but he missed the shot

(11a) も (11b) と同様，あくまで銃で狙い撃ちをしただけで，当たったかどうかには，関与しない．ただし，tirer sur の形式は，一回毎の射撃行為を指すのに多く用いられ，(11a) のような他動詞用法では,「ウサギ狩り」という一般的な行為を行ったという意識がある．

フランス語のように結果に言及しない表現形式を中心に持つのは，次の中国語も同様である．

(12) 我 射　了　　他，可是 没　射中．
I　shot PERF him, but　not shot-hit
'I shot him, but I didn't hit it.'

(13) 我 記　　了，　可是 没　記住．
I　remember PERF but　not remember-stop
'I remembered it, but it didn't stay in my memory.'

(12) が示すように,「射了他」(=shot him) といっても，彼に銃弾が当たった結果を含意しない．これは，奇妙な現象に見えるかもしれないが，中国語では，この結果を含意しない形が無標であり，結果補語形式[9]を使い「射中」と言って初めて当たったことになる．同様の現象は，(13) でも見て取れる．ここでは,「私は覚えた」(我記了) と言っても，記憶に無いと打ち消すことが矛盾しないことが分かる．この場合も，後続文で「記住」を使って始めて結果として，記憶が残ったことを表現する.[10]英語の他動詞文が結果到達を典型的に含み，その結果の含意を含まないものが動能交替だとすると，中国語は，まさにこの逆をしていることになる．

次に日本語の場合を考えてみよう．(14),(15) のような助詞の交替現象が動能交替を示しているようにも見える．ただし，(15b) に関しては，不自然であると判断する者もいる．

(14) a. 太郎は 矢で 熊を 射た．
b. 太郎は 熊に 矢を 射た．

(15) a.　太郎は 銃で 熊を 撃った．
b. ?太郎は 熊に 銃を 撃った．

(14a) の「熊を矢で射た」は，熊が直接動作の働きかけられる対象であり，矢は確実に熊に命中していると考えられる[11]．これに対して,「熊に矢を射た」は，対象である熊は移動物 (Theme) であり，(14d) が示すように命中したことは含意されない．

(14) c. * 太郎は 矢で 熊を 射たが，矢は熊に当たらなかった．
d. (?) 太郎は 熊に 矢を 射たが，矢は熊に当たらなかった．
e.　太郎は 熊に [向かって/めがけて] 矢を射たが，矢は熊に当たらなかった．

(14d) の意図するところは，極めて (14e) に近い．しかし，(15b) の不自然さはいったい何に起因するのだろうか．1 つの可能性は,「矢を射る」並びに「銃を撃つ」が統語的に 1 つの独立した構成素，この場合は自動詞になっていて，目的語を取る他動詞用法が無いと

する考え方である．一見して格助詞「を」を伴った動詞句を表しているように見えるため，助詞の「に」が方向性を含意するのではなく，被動者 (Patient) としての解釈を受け，かろうじて成立しているのかもしれない．このように仮定することで，(14f) が示すように，「矢を射る」「銃を撃つ」が，ACTIVITY[12] を表しているだけで，達成結果は含意されないという結果と符合する．

(14) f. 太郎は 矢を射たが，矢は熊に当たらなかった．

(15) c. 太郎は 銃を撃ったが，銃弾は熊に当たらなかった．

韓国語では，日本語の「X は Y で Z を射る」に対する，「X は Z に Y を射る」の形も許容される．

(16) a. talo -nun hwal-lo/chong-ulo kom-ul sso -ass-ta
太郎 は 矢で/鉄砲で 熊を 射る PAST

b. talo -nun kom-*eykey* hwal-ul/chong-ul sso -ass-ta
太郎 は 熊に 矢を/鉄砲を 射る PAST

(16b) は，「矢/弾丸が熊に命中したかどうか」については不確定である．しかし，(16a) の文でも，しかも，日本語の (14b),(15b) に対応すると思われる (16a) においても，(16c) のように後続文で否定することが可能である．

(16) c. talo -nun chong-ulo kom-ul sso-ass-nuntey, pisnaka-pe li-ess-ta.
太郎 は 鉄砲で 熊を 撃ったが はずれて しまった

一見，(16a) であっても「銃弾が命中する結果」まで含まないように思えるこの現象はどう説明したらよいのだろうか．実は，(16c) に対応する日本語も，同じように可能であると判断する話者がいる．[13] これは，「(熊) を撃つ」と言う場合にいわば「熊撃ち」というような ACTIVITY が考えられるからであり，分析的に解釈して「熊」を対格目的語とする読みでは無い．「熊撃ち」のような名詞化が可能であっても，「熊射り」は不自然である．

4. 英語以外の言語における打撃・接触動詞と動能構文

ここでは，英語以外の言語の打撃・接触動詞のふるまいを動能交替という現象に焦点を当てて検討してみることにする．

英語における典型的な打撃動詞 hit, strike, beat が挙げられるが，これらにほぼ対応した意味を持つと考えられる各国語のデータを検討してみよう．

(17) a. John [hit/struck] the fence with the stick.

b. John [hit/struck] *at* the fence with the stick.

(18) a. Peter schlug eine Fliege mit der Klatsche.
Peter hit a fly with the fly-swatter

b. Peter schlug mit der Klatsche *nach* einer Fliege.
Peter hit with the fly-swatter toward a fly

(19) a. * Il a frappé la table.
he hit the table

b. Il a frappé *sur* la table.
he hit on the table

(20) a. 小王 打 了 大門
Mr.Wang hit PERF door

b. 小王 打開 了 大門
Mr.Wang hit-open PERF door

(21) a. 太郎が 馬を むちで 打った.

b. (?) 太郎が 馬に むちを 打った.

(22) a. talo -ka mal -ul hoycholi -lo ttayli-n-ta
太郎 が 馬 を むち で 打つ.

b. ? talo -ka mal -*eykey* hoycholi -lul ttayli-n-ta
太郎 が 馬 に むち を 打つ.

そもそも動詞の表す行為の結果が，ほとんど含まれない中国語の場合を除くと，一見して動能交替が成立しているように思える．しかし，各言語で事態は微妙に異なっている．(18) におけるドイツ語の例は，確かに前置詞 nach を伴った (18b) が「打った」行為の結果まで含意しない表現であるが，schlagen は，$NP_{ACC} + [_{PP}$ mit NP] という構造では，対格目的語が有性 ([+animate]) でなければならないという制約がある．よって，(23a) の den Tisch(=the table) を対格目的語にする場合は不適格である．また，被動者を前置詞 gegen(=against)[14] で表す場合，$[_{PP}$ mit NP] + $[_{PP}$ gegen $NP_{ACC}]$ という構造の中で gegen の後ろの名詞句は有性であってはならない ([-animate]) ため，(23b) における gegen Maria も非文である．schießen(=shoot) のケースで見たように，ドイツ語での動能構文に典型的に使われる前置詞 auf と nach を付けて (16b) に対応するドイツ語の文 (23c) は，nach の場合不適格な文となる．auf の場合は，実際に「テーブルの上を殴りつけた」のであり，ここで問題としている動能構文での auf では無く，本来の方向の前置詞でしかない．

(23) a. Peter schlug [*den Tisch/Maria] mit dem Stock.
Peter hit [the table/Maria] with the stick

b. Peter schlug mit dem Stock gegen [den Tisch/*Maria].
Peter hit with the stick against [the table/Maria]

c. Peter schlug mit dem Stock [auf den Tisch/*nach dem Tisch].
Peter hit with the stick [on the table/toward the table]

このように見てみると，(18a),(18b) の交替現象はかなり稀な環境でしか用いられないことが分かる．

フランス語の場合，(19a) の容認性は低い[15]のに対して，(19b) が問題ないのは，対格名詞の有性条件が関係しているからであろう．前置詞句の (19b) のような場合は，前置詞句内の名詞が有性である必要はない．(19b) の意味するところは，例えば憤慨した時などに見られるテーブルをドンと叩く動作であり，明らかに接触という結果を含意する．

類似した動詞 taper(=beat), cogner(=knock) では，一見動能交替のように見える他動性交替が観察される．

(24) a. Maman, elle m'a tapé!
Mom she me.ACC hit
b. Il a tapé *sur* sa femme.
he hit on his wife

(25) a. Il cognait furieusement le bureau de l'institutrice de son poing massif.
he wa-knocking furiously the desk of the-teacher of his fist massive
b. Il a cogné du poing *sur* la table.
he knocked of-the fist on the table

しかし，前置詞 sur の付いた (24b),(25b) の形でも，結果としての接触は含まれていて，しかも (23a),(24a) に比べて小さなアクションでの繰り返しを想起させるようだ．

ここでの説明の可能性は，統語的な前置詞句の役割に求められるかもしれない．すなわち，$[_{\mathrm{PP}}$ sur NP] の部分がそもそも動詞の項ではなく，単なる付加詞 (Adjunct) であり，この構文では，繰り返しを含む ACTIVITY しか表現されていない，と考えることができる．

韓国語の場合，(22b) が問題となるのは ttayli-ta(殴る) が道具を対格に取れないからだとされる．すなわち，(22b) が奇妙に感じる理由は，(22c), (26) の場合と同じである．

(22) c. ?? hycholi-lul ttayli-ta (むちをなぐる)
d. hyocholi-lo ttayli-ta (むちでなぐる)

(26) * talo-nun cilo-eykey ca-lul ttayli-ess-ta.
太郎は 次郎に 定規を なぐった

最後に日本語の (21a),(21b) について考えてみよう．すでに上で述べたように，(20b) の「X に Y を V」の構造は，必ずしも認容度が高くない．さらに，「打つ」の場合，結果としての接触も含意されてしまう．(21c) が許容できないのに対して，(21d) がそれほど不自然でないことが，この事態を裏付けている．[16]

(21) c. * 太郎が 馬に むちを 打ったが，当たらなかった．
d. (?) 太郎が 馬に むちを 打ったので，馬は一層速く走った．

ここで，A)「X に Y を V」という構造と B)「X を Y で V」という構造として比較してみると，これは Kageyama (1980) で言うところの spray-paint hypallage と同形であることに気づく．

(27) a. 太郎が 壁を ペンキで 塗った．
b. 太郎が 壁に ペンキを 塗った．

この交替現象は「全体と部分」(holistic vs. partitive) の含意の違いであり，(27a) が一般に壁全体にペンキが塗られたことを含意するのに対して，ごく一部でもペンキが塗られれば，(27b) の事態は成立する．[17)]

川野 (1997:30ff) は，この 2 つの構造に関して，A) は「物の位置変化」を表し，B) は「場所の状態変化」として説明している．例えば，

(28) a. グラス$_{場所}$ に 水$_{物}$ を 満たす．
b. グラス$_{場所}$ を 水$_{物}$ で 満たす．

(29) a. グラス$_{場所}$ に 水$_{物}$ を 入れる．
b. *グラス$_{場所}$ を 水$_{物}$ で 入れる．

川野 (1997:30ff) では，「満たす」と「入れる」を比較し，動詞の語彙情報として「場所がその表面を 物 ですべて覆われた状態になること」という成立条件を「入れる」は満たしていない．[18)]

日本語で，この「全体 - 部分」交替を引き起こす動詞としては，この他にも「飾る」「詰める」「巻く」「ちらかす」「満たす」などかなりの数に及ぶが，川野 (1997) は，「場所と物と完全に結合し，一体化した状態になること」が 1 つの語彙情報としての条件だと指摘する．

このような観点から，(21a),(21b) を再検討してみると，(21a) が「全体的」(holistic) な読み，(21b) が「部分的」(partitive) な読みに対応しているようにも見える．実際，ここで話題にしている打撃動詞は，接触をその意味に含んでいるから，川野 (1997) の定式化でも説明できることになる．ただし，「打つ」の代わりに，「叩く」，「ぶつ」，「殴る」に変えても，同じように「X に Y を V」の形式が不自然なので，単純に spray-paint hypallage ，あるいは「全体 - 部分」交替と同一視することはできない．[19)]

5. 接触動詞

英語の touch には (30) が示すように動能交替が無いとされているが，この点をフランス語，ドイツ語，日本語と比べてみよう．

(30) a. The cat touched my leg.
b. * The cat touched *at* my leg.

(31) a. Il ne faut pas toucher les fleurs.
it NEG is-necessary not touch the flowers

'you must not touch the flowers.'

b. Il ne faut pas toucher *aux* fleurs.
it NEG is-necessary not touch at-the flowers
'you must not touch the flowers.'

(32) a. Peter tastete/berührte die Geschwulst mit den Fingern.
Peter touched/touched the tumor with the fingers
b. Peter tastete/*berührte *nach* dem Lichtschalter.
Peter groped/touched toward the light-switch

(33) a. 太郎が レンズを 手で さわる.
b. *太郎が レンスに 手を さわる.
c. 太郎が レンズに 手で さわる.

(34) a. ?太郎が レンズを 手で 触れる.
b. 太郎が レンスに 手を 触れる.
c. 太郎が レンズに 手で 触れる.

(31) の toucher(=touch) は，(31b) のように前置詞の介在した構文で使うことができる．(31a) が，物理的な直接であるのに対して，(31b) は,「花に向かって手を出す」という行為に中心があるようだが，予想に反して結果としての接触を含意している.[20](31b) がどのような意味で (31a) と区別しうるかという点に関しては，検証の方法が分からないが，(31a) に比較すると (31b) は,「花に手を接触させることで，何らかの形でダメージを与えてはいけない」という AFFECTEDNESS の意味合いが加わっているようである．

(32) の tasten(=touch;grope) は，前置詞 nach(=toward) を取る場合と取らない場合があり，nach を伴った用法では,「手探りで探す」という意味になり，実際に接触という結果につながらない．tasten の場合，必ずしも直接的な接触である必要はなく，(32a) のように,「(腹の上から) 腫瘍を手探り探し当てる」といった意味で用いる．(32b) での berühren は，直接接触を意味するので，Peter が医者で「手術中に腫瘍を触った」のような文脈でしか使うことはできない．

日本語の場合,「触る」と「触れる」では微妙に異なる．どちらも,「X に Y で V」の形を許容するが，上述の打撃動詞や「全体 - 部分」交替のような 2 つの形を原則的に許容しない．これは,「さわる」が主語の意図的な接触であるのに対して,「触れる」が意図性を含まないからだと推測できる.「太郎は，レンズを手でふれた.」の文をおかしいと感じる話者でも,「太郎は，レンズを手でふれてみた.」とすれば問題なく受け入れる傾向がある．すなわち，この「V + みた」の形で,「試しにあることを意図的に行う」という意味が加わったからだと推定できる．

このように,「触れ方」にも実はいろいろな種類があり,「ゆっくりとでも，ある物の方へと手を伸ばす」という意味を持つ動詞は，ほぼ動能交替を持つと想像できる．フランス語の場合，effleurer（「軽く触れる」）と tâter (「触ってみる，手探りする」）は，他動詞用法しか見られない．ドイツ語の streifen (= stroke) は，非意図的接触を表し，対格目的語を必要とするが，前置詞句を取った交替現象は見られない．これは，とりもなおさず，主語の意図性と動作の方向性に欠けているからで，この事は，(35a) が (35b) のように，非人称主語の文に書き換えられることからも明らかである．

(35) a. Ich habe mit dem Mantel die frischgestrichene Wand gestreift.
I have with the coat the fresh-painted wall stroke

b. Der Mantel hat die Wand leicht berührt.
the coat has the wall lightly touched Meil/Arndt (1975:149)

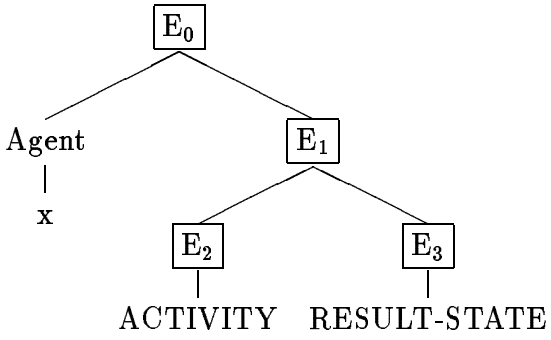
6. 動能交替における結果の含意

ここまで，６つの言語の打撃・接触動詞を中心に動能交替とそれに類する現象を見てきた．Goldberg (1995) 流に言えば，[+motion,+contact] という特徴を持つ動詞なら動能交替がありうるというが，実際には，動能構文自体が，1) 接触を含意した違った行為の結果を表す場合と，2) 中国語やフランス語のように存在しない言語があることが分かった．行為の結果まで動詞の意味が含んでいるか否かに関しては，日本語も韓国語も英語やドイツ語に比較してかなり低いと推察できる．

そこで，移動と接触を含意する動詞を１つの類として考えた時 (純粋な接触状態を表す状態動詞を除いて)，２つの類型が考えられる．

１つは，英語やドイツ語のように，結果まで含む対格目的語構文を中心に組み立てられている言語では，その結果達成を含まない異形として動能構文が存在する．もう１つは，中国語のように，動詞の ACTIVITY を中心に意味構造が組み立てられており，結果の達成のためには，その部分を付け足すような別の表現手段が必要な言語がある．

図示すると，出来事全体を E_0[21]として，これら２つのタイプの言語を比較すると，E_1 を中心に，動能構文をつかって初めて E_3 を切り離せる言語と，動詞が基本的に E_2 のタイプの事態（すなわち，ACTIVITY)しか表せないので，結果の達成の為には，E_3 を何らかの統語的な手段を使って実現しなければならない言語があることになる．



英語では，上で述べた動能交替が典型的な他動性交替 (Transitivity Alternation) であった．この場合，対格目的語から前置詞句への「格下げ」は，他動性を弱める働きをする．即ち，英語の動能交替と呼ばれる現象での意味変化は，以下の３つになる．

英語の動能構文
(a) 結果状態の達成に関与しない (hit at, shoot at, strike at)
(b) 本来の行為が達成されない (slap at, cut at)
(c) 小さな繰り返しの行為になる (beat at, scrape at)

ドイツ語の場合は，英語にかなり近い現象が見られるものの,「なぐる」系列の動詞 (schlagen, stoßen, hauen, prügeln) では一様に対格目的語に有性性を要求するため，実際にその用例は少ない．hauen(=hit) においては，対格目的語を取る場合は「殴る」になるが，動能構文の場合は比喩的に「襲いかかる」の意味になる.[22] ドイツ語のケースをまとめてみると，次のようになる．

ドイツ語の動能構文
(a) 結果状態の達成に関与しない (auf einen Vogel schießen, nach einer Fliege schlagen)
(b) 打撃の対象が [- animate] の時に，前置詞句が使われるだけで行為の達成はなされる．(auf den Tisch schlagen)
(c) ある目標を求めて移動する (nach dem Lichtschalter tasten)

フランス語では，基本的に結果達成を含まない形が無標であるため，他動性交替であっても典型的に結果状態の達成には関与しない．動能構文は無いと考えられるが，似た形の他動性交替は存在する．その特徴は：

フランス語の疑似動能交替
(a) 繰り返しの行為が含意されている (taper + (sur) + NP, cogner + (sur) + NP)
(b) 意図的な接近行為の有無 (touche les fleurs vs. toucher aux fleurs)
(c) 比喩的な意味になる (*toucher le printemps vs. toucher au printemps)

中国語では，動詞がやはり結果まで含意しない形が支配的なので，行為の結果を表す結果補語と呼ばれる形が作られる．すると，今度は逆に，どのような打撃・接触動詞で結果補語が取れて，その違いは何かという所に注目せざるを得ない．

(36) a. 小王　　打 開　了　　大門
Mr.Wang hit open PERF door
b. 小王　　推　開　了　　大門
Mr.Wang push open PERF door
c. 小王　　拍　開　了　　大門
Mr.Wang slap open PERF door

d. 小王　　敲　　开　了　　大門
Mr.Wang knock open PERF door

(36) で使われている動詞は,「打」(=hit),「推」(=push),「拍」(=slap),「敲」(=knock) であるが，直後に現れる結果補語「開」は全てに接続可能である．ただし，(36a) と (26b) のように「打」や「推」の場合は，主語の「小王」の力でドアが開くという解釈がされるのに対して，(36c),(36d) では,「ドアを開ける」行為者が，主語の「小王」ではない解釈が想起される．ここでは，明らかに衝撃の強さが関係しており，弱い衝撃でしかない「拍」や「敲」の場合，その直接の結果として「ドアが開く」という解釈に結びつかないようだ．

日本語の動能交替の候補として上で挙げた「Y を X で V」と「X に Y を V」の交替現象は,「射る」,「撃つ」のような例では成り立っているように見えるが，一方で「全体 - 部分」交替として見ることもできる形式だった．特に「X に Y を V」の形式で，わずかながら成立しているように思える動能交替は,「を」格を「に」格に降格することにより生ずる現象として共通の原則の上に捉えられるのかもしれない．例えば，(37) のような「つける」を付加する例を考えてみよう．

(37) a.　小次郎は 剣で 武蔵を 切った．
　　 b. * 小次郎は 剣で 武蔵を 切りつけた．

(38) a. * 小次郎は 剣で 武蔵に 切った．
　　 b.　小次郎は 剣で 武蔵に 切りつけた．

(37) と (38) は，補助動詞「つける」を付加することで認容性が逆転する．(37a) が結果の達成を含むのに対して，(38b) は，あくまでも「切る」という行為を被動者「武蔵」に対して行ったというだけで，実際に武蔵が切られたかどうかには言及していない．この意味では，(38b) は，動能構文の意味に近い.[23]

これに対して，(38a) は,「切る」という行為動詞が使われており,「に」格を使って被動者を表すことはできない．一方 (38b) では,「武蔵に」が着点 (Goal)[24]，補助動詞「つける」が起動相 (inchoative) の意味を担っているので,「切る」という動作の結果に関与しない読みが生ずる．

「Y を X で V」と「X に Y を V」の構文交替は，英語の動能交替のように他動性交替ではない．それに対して，(37),(38) は,「を」格と「に」格の交替であり，他動性交替であるが，補助動詞「つける」によって初めて可能な形である．

7. 動能交替の裏にあるもの

これまでの考察で明らかになったことは，動能交替として挙げられる “shoot/shoot at” のような英語の動能交替は，決して一様なものではない，ということである．Guerssel et al (1985:58f) が *cut* タイプの動詞の項構造に適用される生産的規則として，動能規則 (conative rule) を位置づけ，これが語彙概念構造に敏感であると主張する時，他動詞構文では目的語

が直接影響を受ける ([+affected]) であるのに対して, それに対応した動能構文では,「必ずしも影響を受けるとは限らない」という極めて弱い特徴づけしか行っていない.[25)]

本稿では，動能交替を当初,「他動性交替の 1 つとして位置づけ，動能構文が結果の達成に関与しないものである」という一般的な了解の元に議論を始めた．しかし，結果の含意の違いを 6 カ国語で比較することにより，次ぎの 2 つの一般性を持つ観察にたどりついた.

(I) 対格目的語を前置詞目的語に変えることは，動詞の及ぼす結果を縮小することにつながる.

(II) 繰り返しを含意する動詞は，一見動能交替のように見えても結果含意の差はほとんど無い.

この 2 点の観察を一般化して捉える為には，動能交替におけるアスペクト変化と，意味役割の変化に注目する必要がある．すなわち，打撃・接触動詞の場合，[$_{\mathrm{VP}}$ V NP] の構造であっても，1) ACCOMPLISHMENT の場合と，2) ACTIVITY 場合があること．さらに，ACCOMPLISHMENT の場合は,「打撃・接触行為」が叙述されているのに対して, ACTIVITY の場合は,「打撃・接触の際の移動」が叙述されている.

このように考えることで，次のような類型化が可能になる.

タイプ (A)

(α) [$_{\mathrm{VP}}$ V NP] ACCOMPLISHMENT
<agent, patient> : patient [+change]
例: shoot $\underline{\text{the bear}}_{\text{patient}}$

(β) [$_{\mathrm{VP}}$ V [$_{\mathrm{PP}}$ P NP]] ACTIVITY
<agent, goal> : goal [±change]
例: shoot at $\underline{\text{the bear}}_{\text{goal}}$

タイプ (B)

(α) [$_{\mathrm{VP}}$ V NP] ACTIVITY
<agent, patient> : patient [±change]
例: beat $\underline{\text{the man}}_{\text{patient}}$

(β) [$_{\mathrm{VP}}$ V [$_{\mathrm{PP}}$ P NP]] ACTIVITY
<agent, goal> : goal [±change]
例: beat at $\underline{\text{the man}}_{\text{goal}}$

タイプ (A)(α), (β) の対が従来典型的な動能交替と考えられてきたものであり，(β) のアスペクトが ACTIVITY になってしまっている所と，意味役割がすでに「(道具の) 移動」の領域 (tier) に変化しているため，前置詞句の中の名詞は，単なる着点としての意味しか持たない．この構造は，2 つの結果を導く．1 つは，“shoot/shoot at” の対のように，動能構文が結果の達成に結びつかない場合（この場合は,「銃弾」がどこかの目標に向かって移動して行く，という事態），もう 1 つは，“poke” が 1 回限りの動作の完了を含意するのに対して，“poke at” の動能構文では，繰り返しの意味を持つ（つまり，ある目標に向かっ

ての移動が繰り返される ACTIVITY）場合である．日本語の場合，ACTIVITY を表す動詞が基本的に多いと考えられるが，補助動詞「つける」を付加することで，結果的に接触が完了したところまで表現される．そのような場合の「を - に」交替は,「に」格が着点をあらわす場合には，動能交替となりうる．

タイプ (B) の場合，(α) がそもそも繰り返しを含む ACTIVITY を表しており，動能構文の (β) になっても，道具の（着点への）移動がより鮮明になるだけで事態としては ACTIVITY として捉えられるため，違いをほとんど感じることができない．これは，英語の “beat/beat at” のペアだけでなく，フランス語の “taper/taper sur” , “cogner/cogner sur” の場合にも当てはまる．ドイツ語の klopfen(=knock) の場合，α の形式でも繰り返しを含むので，明らかにタイプ (B) であるが，β の動能構文では，着点を表す前置詞 “an” の支配する名詞句が「対格 - 与格」交替を起す．通常は，対格が優先されるが，与格の場合は，場所 (location) における ACTIVITY として位置づけられ，タイプ (B) の変異形と考えられる．中国語の場合，ACTIVITY を表す動詞に結果達成を示す「了」という形で，動能交替の効果を逆に作り出しているが，その場合，タイプ (A) の (β) から (α) を作り出すメカニズムと考えられる．それに対して，中国語には，同一動詞を重ねて使うことにより繰り返しを示す表現があるが，その場合「了」を付加して結果事態の成立を表現することができないという制限がある．これは，繰り返しを含むタイプ (B) の交替現象の (β) から (α) を作り出す場合に相当するが，中国語にはタイプ (B)(α) に対応する言い方が無いということになる．

8. まとめ

動能交替は，項構造と意味構造（あるいは語彙概念構造）と密接に関連した極めて規則的な現象と考えられてきた．しかし，現実に動能構文を比較検討することで，実際にはかなりの結果含意の違いがあることが判明した．6 カ国語の打撃・接触動詞を分析した結果，アスペクトと意味役割の観点から大きく分けて 2 つのタイプの動能交替が考えられ，英語，ドイツ語，フランス語，日本語，韓国語は，この視点から統合して説明できることを示した．

注

1) 本稿は，英語のデータは，鷲尾龍一，韓国語のデータは鷲尾龍一，中国語のデータは佐々木勲人，フランス語のデータは，中本武志，日本語のデータは橋本修，ドイツ語のデータは岡本順治が中心になって検討し，全員での討議を経て，最終的に岡本がまとめた．討議の段階では,「東西言語文化類型論特別プロジェクト」第二部門の他のメンバーからも，その時々で貴重な助言を得ており，部分的にはその議論の結果も反映されている．また，各国語のインフォーマントとしては，英語が Roger Martin（筑波大），ドイツ語が Daniel Kern（学習院大），フランス語が Jean-Gabriel Santoni（筑波大），中国語が劉勳寧（筑波大）, 韓国語は，安平鎬（筑波大）各氏に中心的に協力して頂いた．この場を借りて感謝の意を表したい．

2) Levin (1993) の言い方をすれば，ここで主に扱うのは打撃接触動詞 (Verbs of Contact by Impact) と接触動詞 (Verbs of Contact) である．

3) Levin (1993:42) “The use of the verb in the intransitive variant describes an “attempted” action without specifying whether the action was actually carried out.”

4) Levin (1993:42) では，ある種の消化動詞 (verbs of ingesting) と *push/pull* 型の動詞は，on を従えるとしている．

5) Pinker (1989:108) “It’s not that that the knife never arrives at the bread; rather, the bread was not properly cut.”

6) Pinker (1989:109)“...the implication is not that her hand never arrived at John’s person, only that the type of contact ordinarily implied by *slap* was not accomplished.”

7) Goldberg (1995:63) “... the verb designates the *intended result* of the act denoted by the construction. The semantics of the construction can be represented roughly as ‘X DIRECTS ACTION AT Y’.

8) 動能構文の定義に関しては，第 6 節で再検討する．

9) 中国語文法でよく使われるこの「結果補語形式」とは，V + X の形式で，X の部分が自動詞あるいは，形容詞で，V の行為の結果を表す．

10) 中川 (1992) によれば,「我殺了他，可是没殺死他.」（僕は彼を殺したが，死ななかった.）も，矛盾しない文として挙げられている．

11) 「銃で熊を撃つ」に関しては,「太郎は銃で熊を撃ったが，弾丸は熊に当たらなかった.」が可能であると判断する話者がかなり存在する．しかし，この解釈は，後続文での否定的事態があって初めて想起されるのであり,「太郎が銃で熊を撃った」という単独の言明では,「弾丸が当っている」という理解が普通だと思われる．

12) Vendler (1967) のアスペクト分類に従った名称としてここでは，ACTIVITY を用い，大枠「行為の継続性を表す」ものとする．

13) 日本語の動詞がほとんど結果までを表現しないと断定する言語学者もいるが,「（銃・矢で）～を射る」,「～を突き刺す」,「～を見つける」など，動作の完結を表す動詞はかなりあると思われる．

14) 英語の hit に見られるような with/against alternation は，有性条件 (Animacy Condition) のため，ドイツ語では成り立っていない．
(i) Paula schlug Peter/*die Tür mit dem Stock.
(ii) Paula schlug den Stock gegen *Peter/die Tür.

15) フランス語のインフォーマント 2 人によれば，(19a) の文は，非文法的であったが，Le Grand (1985) の frapper の項目には，J. Romains *les Hommes de bonne volonté* からの文として，次のような文が挙がっている．
Il lui arrivait de scander les membres de phrase, en frappant légèrement la table d’un coupe-papier (...).

16) (21a) は，直接的に馬に働きかけるという意味で，目的を遂行したと解釈できるが，(21b) では，別の目的，例えば競馬の騎手が「むちをあてる」という場面を想定すると，馬を速く走らせるために行為を行っている，という解釈も可能である．

17) (27a) が，必ずしも「全体」に行為が及んだことにはならない，という反論がある．つまり，(27a) は，そもそも「ペンキで」という手段の部分が前景化されているだけで,「を」格の名詞は単に「被動者」でしかない，とする解釈である．この読みは,「ペンキで」の所に焦点が置かれたものとして十分可能であるが，(27a),(27b) では,「壁を/に」に焦点が置かれた読みの違いを扱っている点が異なる．

18) ここで挙げた成立条件は，川野 (1997) で,「壁塗り代換」における「場所の状態変化」として示されたものの 1 つである．詳しくは，川野 (1997:30) を参照のこと．

19) 「刺す」の場合,「X に Y を V」の構造でも不自然さはない．この場合,「に」格は場所を指し，刺した場所の対比 (contrast) を示すだけで，結果の含意とも「全体- 部分」交替とも関係ないようだ．例えば，
(iii) 太郎が次郎の背中をナイフで刺した．
(iv) 太郎が次郎の背中にナイフを刺した．
英語の poke は動能交替を起こすが，意味するところは繰り返しの接触であり，後で述べる英語動能構文 (c) タイプである．
(v) Alison poked the cloth.
(vi) Alison poked at the cloth. Levin (1993:154)

20) 実際には，(31b) のような形は,「〜に手を加える，関係する」といった比喩的用法が多い．

21) E は状態，プロセス，行為などの出来事の総称として Eventuality の E を取って表した．

22) Er hieb den Jungen. (彼は，その男の子を殴った．) に対して，Er hieb mit dem Schwert *auf* den Feind. (彼は，剣で敵に切りかかった．) のような使い分けがされる．

23) 「切りつける」の解釈には,「接触」が含まれるかどうかは，議論の分かれる所かもしれない．「V + つける」には,「塗る」に対して「塗りつける」という接触面積増加を含意する場合と,「切る」に対する「切りつける」のように行為の立ち上がりの部分に関係している場合があるようだ．

24) 中右 (1995;20) が指摘するように,「に」格が行為述語の時に「位置」あるいは「着点」どちらかを示すと考えられるが，動詞が [+motion] の場合は,「着点」であると考えられる．

25) Guerssel et al (1985:59)"In the non-conative the entity denoted by this argument is affected, but in the conative this is not necessarily so."

参考文献

Goldberg, A.E.(1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago/New York: The University of Chicago Press.

Guerssel, M./K. Hale/M. Laughren/B. Levin/J. W. Eagle (1985) "A Cross-Linguistic Study of Transitivity Alternations." *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity. CLS* 21, Part2, 48-63.

Iwata,S. (1989) "Multiple Conceptual Structures of a Single Verb: the Case of *Strike*." *Tsukuba English Studies.* 8, 179-203.

Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kageyama,T.(1980) "The Role of Thematic Relations in the *Spray Paint* Hypallage." *Papers in Japanese Linguistics.* 7,35-64.

影山太郎 (1996) 「動詞意味論：言語と認知の接点」くろしお出版.

川野靖子 (1997) 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点：いわゆる『壁塗り代換』を中心に」『筑波日本語研究』 2，28-40.

Laughren, M. (1988) "Towards a lexical representation of Warlpiri verbs." In W. Wilkins (Ed.) *Thematic relations.* New York: Academic Press, 215-242.

Levin, B. (1996) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigations.* Chicago/London: The University of Chicago Press.

Levin, B./M. Rappaport Hovav. (1991) "Wiping the slate clean: A lexical semantic exploration." In (Eds.) B. Levin/Steven Pinker. *Lexical & Conceptual Semantics.* Cambridge, Ma.: Blackwell, 124-151.

Levin, B./M. Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Meil, K./M. Arndt (1975) *ABC der schwachen Verben.* München: Max Hueber.

中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館.

中右 実 (1995) 「『に』と『で』の棲み分け：日英語の空間認識の型 (1)」『英語青年』160巻，10号，520-522.

中川 正之 (1992) 「類型論からみた中国語・日本語・英語」『日本語と中国語の対照研究論文集（上)』くろしお出版，3-21.

大矢俊明（1997)「ドイツ語における使役交替と非対格性」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社，67-95.

岡本順治（1997)「イベント構造から見た使役表現：使役の意味の広がり」『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社，161-208.

Pinker, S. (1989) *Learnability and Cognition: Acquisition of Argument Structure.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

Pustejovsky, J. (1995) *The Generative Lexicon.* Cambridge, Mass.: MIT Press.

朱徳熙 (1982) 『語法講義』商務印書館.

Washio, R.(1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation." *Journal of East Asian Linguistics.* 6, 1-49.

参考言語資料

Dictionnaire(1987) *Dictionnaire de français 35000 mots.* (1987)

Le Grand(1985) *Le Grand Robert de la langue française, dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française.* 2e edition. (1985) Le Robert.

Longman(1995) *Longman Dictionary of Contemporary English.* Longman Group Ltd.

Trésor(1971-94) *Trésor de la langue française.* tome 1-16. (1971-1994) Centre national de la recherche scientifique.